

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：32617

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26360014

研究課題名(和文) 中国領下有の現代チベットにおける聖地表象と移動による信仰圏形成に関する包括的研究

研究課題名(英文) A Comprehensive Study on the Formation of the Religious Sphere by Representations of Sacred Sites and Broader Mobilization in Contemporary Tibet under the Communist Regime

研究代表者

別所 裕介 (BESSHO, YUSUKE)

駒澤大学・総合教育研究部・准教授

研究者番号：40585650

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中国政府の過渡的な近代化プロセスの元で再編されるチベット東部地域の民衆的な宗教経験について、12年ごとの周期で訪れる「ニンデイ」(聖地集会)と呼ばれる大規模な巡礼活動を対象に検討した。

現地調査では、個別の聖地に対する宗教表象の増加と、これに対応する信徒集団の空間的実践の関係を、インタビューと参与観察から浮き彫りにした。この結果、信徒による現場での信仰経験、関連する経済活動、関連する政治的統制、の3点において、従来のチベット研究が払拭しきれなかった「民衆の宗教行為に対する外在的な理解の枠組み」を乗り越える上で必要な視座について見通しを持つことができた。

研究成果の概要(英文)：In this study, I clarified the characters of folk religious practice re-formed in the eastern part of Tibet, which was undergoing transitional modernization process under the communist regime. I could observe large scale pilgrimage movements from 2014-2016 since Tibetan pilgrim increased rapidly during these years according to their religious calendar.

Through the actual field survey, I examined the relationship between increasing religious representations in the sacred sites and spatial practices by the devotees group through analyzing interviews and participant observation. As a result, my research will be able to raise a micro-level viewpoint for overcoming the framework of an external understanding to popular religious practice which was held by the previous studies in following three points: (1) devotee's actual experience at the practice spots, (2) concerned economic activities by local traders, (3) political control by local government.

研究分野：文化人類学

キーワード：現代チベット 仏教 聖地表象 巡礼空間 辺境開発

1. 研究開始当初の背景

従来、欧米研究者を主体とする聖地研究では、仏教文献に見出される浄土的コスモロジーの理解を主軸として、そのコスモロジーを現世において反映する特定の仏教聖地における自然空間の宗教的な構成と、そこで信仰活動に没入する巡礼者の儀礼的な対応関係が最大の関心事となってきた。

改革開放後の本土チベットで本格的に施行されるようになったこれらの研究では、特定の聖地に関してチベットの高僧たちが著した著述の中に認められる聖性の根拠に対して、実際のチベット人巡礼者による儀礼行動がどの程度合致しているのか、あるいはズレを見せているのかについて、その要因と背景が詳細に検討されてきた。他方で、そうした規範性の高い研究は、聖地を形作る第一義的要因を文献に描かれるコスモロジーに固定しており、聖地の物理的空間や生身の巡礼者はこのコスモロジーに一元的に統御される従属要因としか見なされてこなかった。ここでは、西部大開発以来の国家主導の辺境開発による聖地空間の物理的な変化や、地域経済の進展による観光化や商業化の影響など、実際の信仰現場で生じている変動がそこでの宗教実践にどのような影響を及ぼすのかについて、正面から検討しようとする姿勢は一貫して希薄であった。

しかし、急速な開発圧力に曝される今日のチベット仏教聖地においては、従来不変の主軸と位置付けられてきた浄土的なコスモロジーが信仰空間を一元的に組織できるとする見立てはもはや不可能となっており、外からの経済開発や政治統制が信仰現場にもたらすバイアスを加味した、コスモロジーだけに帰結しない新たな分析枠組みの構築が急務となっている。

2. 研究の目的

上記の問題を打開するためには、共産主義政権下で過渡的かつ急速な近代化状況に置かれている現代チベットの聖地に形成される民衆的な宗教実践の空間について現地調査を実行し、直接的な参与観察の元で、その空間内部における商業主義の発達や政治的介入といった変動要因がもたらす影響を加味した分析を行うことが必要である。

こうした作業を通じて本研究が最終的に達成を目指す目標は、市場経済化の進展と昨今の汎チベット民族主義の高まりの中で、現代チベットの信仰実践を、実践者自身の内的宗教経験の地平から理解する方途を開拓することにある。これにより、従来のチベット研究が払拭しきれなかった「民衆の宗教行為に対する外在的な理解の枠組み」を乗り越えることが可能になると考える。このため、12年に一度の周期で民衆の巡礼活動が大規模に活性化する「ニンディ (gnas 'dus)」と呼ばれる干支年巡礼を好機ととらえ、個別の聖地に対する宗教表象の増加と、これに対応す

る信仰圏の広がりの方を、実地における巡礼者への対面インタビューならびに定点観測による量的調査によって明らかにすることを旨とした。

3. 研究の方法

上述のように、本研究では、「聖地巡礼」という信仰活動を題材として、中国領有下の現代チベットに再生する民衆の宗実践をこれまでよりも包括的な視点で捉えるため、改革開放以降に本土チベットで全面的に復活した「ニンディ」を対象として各年度ごとにフィールド調査を実施した。

「ニンディ」とは、特定の干支年に、これとゆかりのある特定の聖地を参拝することで特別な功德が得られると考えるチベット独自の巡礼伝統である。調査対象となるチベット東北部・アムド地方 (青海省) においては、午年に聖山アニ・マチェン (日本名アムネマチン)、未年に聖湖ツォ・ゴンボ、申年に聖山チャカル・ゼーションへそれぞれ参拝することが伝統的な習慣となってきた。ニンディの期間中には、日常生活圏から離れたこれらの聖地に向けて広範な人の移動が発生し、仏教コスモロジーに準じた聖域の表象が活性化するとともに、信仰圏の社会的広がりが顕在化する。

本研究はこの機会を捉え、国家主導の開発に伴う辺境型市場経済の浸透と、それに対応する形で多層化していく現代チベットの宗教信仰が交差するひとつの重要な焦点としての聖地を捉え直すため、調査対象となる各々の聖地について、聖地文書の解析と儀礼過程への参与、巡礼者の社会的属性についての量的調査、個別の巡礼者に対するインタビュー、という3種類の調査方法を順次遂行した。

4. 研究成果

(1) 2014年：午年巡礼調査

研究の初年度では、アムド地方で名実ともに最大の聖山と称されるアニ・マチェンの干支年巡礼を対象に、量的調査と質的調査の両面からアプローチを行った。

2014年8月に行った現地調査では、聖山への登山口にあたるツアルナクカムドという場所に定点観測地を設け、10日間にわたって巡礼者の出身地とグループ属性、ならびに移動手段についての調査を行った。また、調査者自身が徒歩で実際の巡礼ルート (一周180Km, 所用5日間) を踏査し、ルート上に展開する各種霊跡の現況を実見するとともに、霊跡を訪れた個別の巡礼者たちが実践する儀礼行為の参与観察を進めた。さらに2015年3月には、アニ・マチェンにおいて「五体投地」による巡礼を実践した巡礼者を対象とした追跡調査を行った。

以上の現地調査により、改革開放後の中国チベットで宗教活動が再開されて通算3度目 (1990年、2002年に続く) となる「干支年

巡礼」の現在的な特徴を捉えることができた。その特徴は主に以下の2点に要約できる。

1990年の午年巡礼に関する文献調査資料、および2002年に報告者自身が行った調査の結果と比較して、今回の2014年午年には、周辺住民による商業化（飲食・宿泊・小売施設の開設）と、地方政府当局によるインフラ敷設が並行的に進んでおり、聖地全体の観光地化に向けた方向づけが顕著に観察された。他方で、聖山巡礼の宗教的な規定要因については、過去2回分の資料と比較して大きな差は見られなかったものの、市場経済の浸透と移動手段の多様化によって、聖地の表象手段が画一化すると共に、その中で行われる信仰実践が純粹化していく傾向が看取された。

(2) 2015年：未年巡礼調査

2年目は、青海省の著名な観光地であり、同省の名前の由来ともなっている女神の聖地ツォ・ゴンボ（青海湖）を対象として、未年の干支年巡礼の現在動態を探るための現地調査を進めた。

2015年7月に行った現地調査では、パンチェンラマ10世（1938-1989）がツォ・ゴンボのほとりで仏教祭儀を行ったことをきっかけに造営されたオボ（土地神供養の社）を中心に5日間の定点観測を行った。また、実際の巡礼ルート（一周360Km）を車で踏査し、ルート上に展開する各種霊跡の現況を実見するとともに、霊跡を訪れた個別の巡礼者たちが実践する儀礼行為に対する参与観察を進めた。さらに2015年9月には、ツォ・ゴンボの環境管理をつかさどる政府部署を訪問し、行政による観光客と巡礼者の双方を視野に入れた環境管理の政策実践について聞き取りを進めた。

以上の現地調査により、国家級自然保護区として地元政府の重点的な環境政策の対象となっているツォ・ゴンボでは、「持続可能な祭儀」や「供物による汚染対策」といった宗教実践に絡む新たな制度的規範が伝統的な宗教勢力によって形成されてきた「聖湖」としての文脈を凌駕してしまう局面が観察できた。同時に、それらの規制は湖への直接的な供養の実施を阻むものとしてのみ機能しており、聖湖周辺に点在するよりマイナーな個別霊跡においては、行政の統制を対象化しつつ、新たに整備された道路交通網や3G回線などの情報インフラを活用した動的な巡礼実践が志向されていることが確認できた。

(3) 2016年：申年巡礼調査

3年目の調査地はチャカル・ゼーゾン（猿の白岩砦）と呼ばれる独立した岩峰である。本調査地に対しては2月、5月、9月の計3回のフィールドワークを行った。特に9月の

調査時には、研究代表者自身が「五体投地」の手法によって巡礼を完遂し、実際の巡礼ルート上に展開する各種霊跡と信仰者の関係性について体感的に実見するとともに、同じく五体投地で巡礼を遂行する個別の巡礼者たちと多くの時間を共有することで、濃密な質的調査資料を蓄積することができた。

また、三回の調査全般を通じて、聖地周域で巡礼者向けビジネスを営む商業民を取材し、合わせて聖地の観光開発と環境管理を担う政府部署を訪ね、現代の聖地巡礼を形作る社会的諸条件の総合的な洗い出しに努めた。

以上の現地調査の遂行により、インフラと情報網に包摂された現代の聖地において、チベット仏教を信奉する巡礼者が、信仰の現場に介在する出稼ぎの商業民、および政府の公的な管理統制との一定の関係を築きつつ、僧院側が提供する情報を取捨選択して、自らの個別な信仰実践を紡ぎ出している状況を具体的に把握することができた。

(4) 2017年：成果まとめ

最終年度は、「干支年巡礼」全体の資料のとりまとめと相互の関連付けのための研究期間とした。2014年から三か年に渡って継続された「干支年巡礼」が完了したことを受け、3つの聖地に対してこれまで行った個別の実地調査資料をとりまとめ、全体をひとつの大枠的な流れをもつモノグラフ資料として組み上げる作業を進めた。作業は年度前半と後半の2つの行程に分けて、下記のように進められた。

- a) 年度前半：申年巡礼の対象地となったチャカル・ゼーゾンでのフィールドワーク資料を重点的に整理し、学術雑誌に投稿した。併せて、この成果をこれまでの各年度に蓄積した個別聖地の信仰動態に関する現地調査データと比較し、その相違を洗い出した。
- b) 年度後半：現代チベットの村落社会に暮らす人々にとって、聖地巡礼という宗教経験が持つ意味を解析するため、「近代性」と「宗教性」という2つの軸を設定し、これまで現地で収集した文献・画像資料と、現地での参与観察から得られたデータの関連付けを行った。

現在、以上の整理に従って、最も近代的に統制が進んだ聖地であるツォ・ゴンボをひとつの極として、これに比して隔絶した環境要因から商業性や行政管理が進展しにくい2つの聖山について個別の位置づけを行い、その結果をまとめたモノグラフの準備を進めている。これにより、伝統的な「宗教性」に対する「近代性」の位置づけを根本的に問うことで、浄土的なコスモロジーの内部に民衆的な宗教経験を回収してきた既存研究の欠落を乗り越え、現代チベットの聖地研究に新たな視座を提起していく。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 15 件)

別所裕介 (2018)「チベット牧畜民の現在と私たちが目指すもの」『チベット牧畜文化辞典』(PDFパイロット版)、星泉(主編) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、v-viii。(査読無)

別所裕介 (2018)「牧畜×ベンチャー×イノベーション：現代チベットにおける牧畜の衰退と新たな挑戦」『SERNYA』5, 130-138。(査読無)

別所裕介 (2018)「混交を内側から切り分ける：チベット高原東縁部の多民族村における宗教実践をめぐって」『駒澤・文化』36, 27-55。(査読無)

別所裕介 (2017)「空間を刷新する儀礼「ドッカ・ベンバ」：牧畜社会の厄払いと年越し行事」『SERNYA』4, 8-16。(査読無)

別所裕介 (2017)「手縫いでないと作れない最高級の民族衣装「ツアル」：牧畜社会の毛皮加工とその技術」『SERNYA』4, 25-28。(査読無)

別所裕介 (2017)「牧畜社会の通過儀礼：幼児の髪切り式を事例として」星泉・海老原志穂他(編)『SERNYA』4, 29-32。(査読無)

別所裕介 (2017)「聖地を切り売りする人々：現代チベットの経済開発と民衆の信仰空間の特性」『宗教研究』390, 201-228。(査読有)

別所裕介 (2017)「グローバルに展開するチベット仏教とダライ・ラマ」『インド文化事典』インド文化事典編集委員会編、丸善出版、714-15。(査読無)

別所裕介 (2016)「巡礼 インフラ 電子網：現代チベットの聖地と辺境市場経済システムの連環」『観光学評論』4(2), 177-193。(査読無)

別所裕介 (2016)「チベット問題」『平和と安全保障を考える事典』広島市立大学・広島平和研究所編、法律文化社、409-10。(査読無)

別所裕介 (2016)「チベットの聖湖・ツォゴンボの表象空間と移動による信仰圏の形成」『宗教研究』383, 426-7。(査読無)

別所裕介 (2016)「『ヤルツァ・エコノミー』 現代牧畜社会における『冬虫夏草経済圏』とその周辺」『SERNYA』3, 60-61。(査読無)

別所裕介 (2016)「持てる者と持たざる者の相克 冬虫夏草バブルが現代牧畜社会にもたらしたもの」『SERNYA』3, 48-51。(査読無)

別所裕介 (2015) "Migration for Ecological Preservation? : Tibetan Herders' Decision-Making Process Regarding the Eco-Migration Policy in Golok", *NOMADIC PEOPLES*, 19(2),

189-208。(査読有)

別所裕介 (2015)「化隆の言語保全運動が示唆するもの カシャムジャ監督『英雄の谷』鑑賞記」『SERNYA』2, 20-23。(査読無)

[学会発表](計 16 件)

Bessho, Yusuke "Selling the Holy Place by the Piece: The 2016 Monkey Year Great Pilgrimage to Drakar Drel dzong and its Pervading Frontier Market Economy", Amdo Research Network 2nd International Workshop, 2017, Faculty of Arts, Charles University in Prague, Prague.

別所裕介「巡礼 インフラ 電子網：現代チベットの聖地と辺境市場経済システムの連環」2016年2月20日、第3回観光学術学会研究集会、法政大学市ヶ谷キャンパス市ヶ谷田町校舎。

Bessho, Yusuke "Introduction for PANEL#9: Decline and Local Innovation in the Pastoral Society of Amdo Tibet", The 14th International Seminar for Tibetan Studies, 2016, The University of Bergen.

Bessho, Yusuke "Reformation of *tsha ru*: Traditional Tibetan Clothing and its Innovation in Contemporary Amdo", The 14th International Seminar for Tibetan Studies, 2016, The University of Bergen.

Bessho, Yusuke "The Possibilities and Limitations of Ecological Discourse on Tibetan Pastoral Life: The Case of the Three-River Headwaters Region.", 4th International Seminar of Young Tibetologists, 2015, Leipzig University, Germany.

別所裕介「現代チベットにおける聖地表象と移動による信仰圏形成 午年の聖山巡礼を事例に」2015年11月14日、第57回日本チベット学会、四天王大学あべのハルカス23階サテライトキャンパス。

Bessho, Yusuke "From 'Ethnic Culture' to 'Ecological Culture': New-reformed concept of 'Primitive Religion' in Contemporary Tibet", 21st World Congress of the International Association for the History of Religions, 2015, Erfurt University, Germany.

別所裕介「チベットの聖湖・ツォ・ゴンボの表象空間と移動による信仰圏の形成」2015年9月5日、第74回日本宗教学会学術大会、創価大学中央教育棟。

別所裕介「信仰表現としての『五体投地』と倒れ込む『場』 現代チベットにおける民衆的な宗教経験をめぐって」2015年5月31日、第49回日本文化人類学会、大

阪国際交流センター。
Bessho, Yusuke “Golok's Bubble Economy: How the CF Boom Creates Consumers, Consumer Investment and Consumer Debt.”, International Workshop for Amdo Research Network, 2014, Humboldt-Universität zu Berlin, Germany.

Bessho, Yusuke “Global Reincarnations: On the Tulkus' Community Formation and Spiritual Lineage Dispersed from Eastern Tibet to South Asia.”, FIELDNET LOUNGE WORKSHOP, 2014, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo.

研究者番号：40585650

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし

〔図書〕(計 3 件)

(共著・分担執筆)

別所裕介(2017)『『包摂』の政治とチベット仏教の資源性 ヒマラヤ仏教徒の社会運動をめぐって』名和克朗(編)『体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相』三元社, 第11章, 406-446.

別所裕介(2015)『現代チベットにおける民族運動と『不殺生』の位相 アムド地方におけるラカルの実践の事例から』澤井充生・奈良雅史(編)『「周縁」を生きる少数民族 現代中国の国民統合をめぐるポリティクス』勉誠出版, 第1章, 3-32.

別所裕介(2015)『チベット問題をめぐる宗教と政治 グライラマの非暴力運動とのかかわりから』櫻井義秀・外川昌彦・矢野秀武(編)『社会参加仏教 アジアにおける宗教と政治』北海道大学出版会第5章, 127-160.

〔その他：ウェブサイト〕

<https://sites.google.com/view/amdostudiesjp/works/paper-download?authuser=0>

〔その他：公開講演会〕

別所裕介「チベット高原の自然と宗教信仰」『公開講演会・チベットの文化に触れてみる』, 2018年1月27日, 鶴見大学会館メインホール.

〔その他：アウトリーチ〕

別所裕介「ローカル・イノベーションの位置づけ」(チベット語講演)『ツォシヨク・サルワ起業セミナー：青海チベット部落人イノベーション・ワークショップ』, 2016年8月6日, 青海省海北チベット族自治州剛察県泉吉郷.

6. 研究組織

(1)研究代表者

別所 裕介 (BESSHO, Yusuke)

駒澤大学・総合教育研究部・准教授